－役員エッセイ－

大通公園を望む窓辺から

医療的ケア児への対応

常任理事　三戸　和昭

９月25日、都道府県医師会小児在宅ケア担当理事連絡協議会に参加した。「医療的ケア」には具体的に、気管切開、人工呼吸器、胃ろう、腸ろう、経鼻胃管、中心静脈栄養、導尿がある。小児医療の進歩により、高度な医療的ケアを必要としながら、歩けて、話せる子ども達が増えてきた。19歳以下の医療的ケア児は平成17年時点の総数が約１万人であったが、平成27年には1.7万人を超えた。また、人工呼吸器児数は264人から3,069人へと、10倍以上増加している。

「障害」は、「知的障害」「身体障害」「精神障害」の３種類のみであったため、歩けて、話せて、精神的に正常で、人工呼吸器を装着した子どもは、「障害が無い」ことになっていた。医療的ケア児支援を定めた法律ができて、医療的ケア児とその家族を地域で支えるために、保健、医療、福祉、教育等が連携して、情報共有を図る「協議の場」が作られた。医療関係では、訪問診療や訪問看護等医療を受けながら生活することができる体制の整備の確保や、小児在宅医療従事者育成のための研修会の実施等がある。保健関係では、母子保健施策を通じて把握した医療的ケア児の保護者等への情報提供等がある。福祉関係では、障害児福祉計画等を利用しながら計画的な体制整備や、医療的ケアに対応できる短期入所や障害児通所支援等の確保等がある。教育関係では、学校に看護師等の配置、乳幼児から学校卒業後までの一貫した教育体制の整備、看護師等の研修による医療的ケアに対応するための体制整備等がある。地方公共団体では、関係課室等の連携確保、相談・連携できる関係性の構築等がある。これら関係機関等の連携による「協議の場」の設置や重症心身障害児コーディネーターの配置等を行う。医療的ケア児とその家族が地域の中で普通に生活できる環境整備が早期に達成されることを望んでいる。

“one team”

理事　立石　圭太

今年の秋は気の重い自然災害のニュースが多く流れたが、ラグビーワールドカップ2019の日本代表の躍進の話に花が咲いた。にわかファンの私は正月だけＴＶ観戦の時代が長く続いていたが、2015年のワールドカップの時からＴＶ観戦の機会が多くなり今回ピークを迎えた。

このワールドカップ開催中に102歳の女性を自宅で看取る機会があった。彼女は20年以上私の外来に通院し週２回のデイサービスを楽しみにする年齢の割にはとてもお元気な方だった。休日の朝、同居の息子夫婦が朝起きると居間で意識のない状態で倒れており数時間経過をみても変わらないと連絡してきた。急変事例で電話を受けた時は方針決定に迷った。高齢者の重篤例の生還率の低さ、すでに状態が数時間以上経過しており、普段の外来では文章でACPを確認したことはなかったが、時々“自分の家で逝けたらいいねー”と話していた彼女の顔を思い出し、訪問時に昏々と眠り続ける彼女の枕元で家族と相談後に救急搬送をせず自宅に留まる方針とした。翌日から担当ケアマネージャー、地域の訪問看護、当院スタッフと女性の嫁とでチームを作り在宅看取りのケアを開始した。キーパーソンの嫁（79歳）は介護経験もなかったが、訪問看護師たちに支えられ１週間後穏やかに彼女を見送ることができた。

数週前からラグビーワールドカップの日本代表を観ているが、地域ケアで話される多職種連携とは、ラグビー日本代表のように人種、体格、国籍の違いを障害とせず相手をリスペクトし“one team”となることと教えられたような気がした。今後は100歳超えの超高齢者を看取るケースでは、家族は後期高齢者、在宅訪問医の私は前期高齢者、訪問看護師も50代で少し足元がぐらつくスクラムですが、桜のユニフォームを着たつもりで次回のフランス大会出場までではと思う日々です。